

芸術を学んだ学生たちはいかにして職業芸術家になるのか

——海外在住の若手芸術家たちへの聞き取りから——

上智大学 相澤真一

1. 目的

本報告では、芸術を学んだ学生たちは、いかにして職業芸術家になるのかを、聞き取り調査を通じて明らかにする。既に、著者は、職業芸術家が専門技能を学ぶ過程（相澤 2018）および教育機関のなかで専門技能を学びながら卓越化する過程（相澤 2019 印刷中）について、明らかにしてきた。本報告では、これらのあとに、実際に労働として芸術に携わりながら、いかにして、職業芸術家になるのか、あるいはそうではなく別の道を選びとっていくのか、またはその二者択一ではないかたちで生計を立てていくのか、そのようなキャリア形成を「学校から職業への移行」の視点を含めながら検討する。

2. 方法

本調査の方法については、既に相澤（2018）に詳述したので、以下、そこでの記述に基づいた概略を示す。2017年8月から9月、2017年12月、2018年3月に、フィンランド（2つの地方都市）とドイツ（ベルリンと地方都市）および東京で聞き取り調査を行った。主には、2016年度に筆者がベルリン自由大学在外研究時に出会ったサンプルにスノーボールで増やす形でサンプルを集め、半構造化インタビューを実施した。彼らに共通しているのは、海外での就学あるいは活動経験のあるアーティストであること、また今回の調査対象は、全員日本国籍を有する者に絞っている。その専門分野は、音楽（主にクラシック）を中心に、パフォーマンス、絵画、写真などである。調査は、2017年8月の欧州の調査と東京の調査は高橋かおり（立教大学）の同行を得て行い、2017年8月の1名のインタビューのみは、調査日程の都合上、高橋の単独で実施されている。それ以外の欧州の調査は相澤が単独で実施した。

また、キャリア形成については、既に本調査から高橋が2本の論考を発表しており、それよりは、より教育社会学あるいは「学校から職業への移行研究」の色彩を強めた立場から結果を報告する。

3. 結果

現時点で行ってきたインタビュー調査の範囲で明らかになっているのは次の事柄である。まず、音楽家で、順調に音楽大学まで卒業してきたり、コンクールで入賞経験があった人たちでも、卒業後にキャリアを築こうとする過程で、今までの専門技能を身につける訓練からうまく方向性を見いだせない時期がしばしばみられる。またその時期が経済的に厳しい時期と重なることもある。このキャリア形成面でも経済面でも厳しい時期と、海外在住のタイミングが一致するか、異なるかは人によって異なる。自身のキャリアを考える時期として海外在住に至る人もいれば、新しいキャリアへの挑戦として海外在住に至る人もいる。

4. 結論

当日は、より詳細にインタビュースクリプトを提示しながら結果を示し、さらに結論を示す。なお、2019年8月に高橋とともに、ドイツにて追加とフォローアップの聞き取り調査を実施予定であり、当日の分析にはそれらも発表に反映させる予定である。

文献 字数の関係上、当日のレジюмеに記載予定。